

障害者スポーツの認知と普及における課題の抽出

The recognition of handicapped person sports and the extraction of the problem in the spread

1K05A005

坪 裕樹

指導教員

主査 中村好男先生

副査 内田直先生

緒言

世界保健機関によると、世界では、人口の7%である約4億9000万人が障害者であるとされている。我が国では、身体障害者数は348万3000人であり、その数は年々増加傾向にある。また、障害者スポーツは、自発的なスポーツから、社会復帰を目的としたスポーツとなり、遂に、リハビリテーションの一環として始まった障害者スポーツが、競技性を持つまでになった。

障害者数の増加と競技性を持った障害者スポーツの発展、この2つの観点から、今後更に障害者スポーツが認知・普及するためにどのような方略があるのかを明らかにしたい。また、障害者スポーツの認知・普及が健常者に進んでいない実態を明らかにし、環境改善、社会改善など、今後の課題を提案することを本研究とする。

概要

障害者スポーツがいかんして誕生し、発展してきたか、そして、競技性を増していったのかを知るために、障害者スポーツの歴史・現在の障害者スポーツを取り巻く環境を調べた。その上で分かったことは、障害者スポーツの認知・普及の問題点は、健常者と障害者の交流機会が皆無であるという現状。そして、認知・普及の向上にはパラリンピックの存在が重要であるということである。パラリンピックを知る上では、オリンピックとの深い関わりがある。そこで、オリンピックの歴史・現在の状況を知り、パラリンピックと比較することで、見えてくることがあった。

オリンピックと比べ、パラリンピックは1960年から

2008年の約50年もの間で、参加人数が約5倍も増加していることが分かった。このことから、普及率という観点からは、オリンピックと比べ、認知・普及が進んでいることが伺える。だが、現状として、2008年大会のパラリンピックの参加人数は、1960年ローマ大会のオリンピックの参加人数に達していないということである。このことから、パラリンピックは未だ発展途上であるのには変わりない。

我が国では、1998年長野パラリンピックを契機に約300億円の障害者スポーツ振興支援基金が創設され、2002年より全国障害者スポーツ大会に3障害が集った。つまり、障害者スポーツの競技性が進み、大会規模の拡大から障害者スポーツの認知・普及が向上していることが言える。しかし、今なお障害者スポーツを行なうための環境施設が著しく乏しく、障害者スポーツはまだ不備であるという課題も見えた。

オリンピックの歴史から見ると、1984年ロサンゼルスオリンピックから商業化が始まり、北京オリンピックでは更に商業化が進んでいることが分かった。このことから、パラリンピックへの商業化の影響も期待できると筆者は推測する。

考察

1) 障害者人口の増加、2) 障害者スポーツ振興支援基金、3) 全国障害者スポーツ、4) 経済効果、5) パラリンピックへの参加人数増加の5点より、障害者スポーツの認知・普及が進んでいることが明確になった。今後更に認知・普及が進むためにも、パラリンピックの規模の拡大・全国障害者スポーツ大会の更なる充実が求められると考える。

また、障害者スポーツに取り組む環境の整備や、障害者と健常者との積極的な交流機会を自治体に求め、それによって障害者スポーツの存在または現状を知り、認知・普及の向上に繋がることを願う。それにより、環境施設や社会形成といった様々な課題が改善されるのではないかという提案をしたい。障害者スポーツが広まるためにも、パラリンピックといった一大イベントの重要性を筆者は

認識した。更に、健常者が、障害者スポーツを通じて、障害者の現状を知ることで、障害者と健常者が区別されない社会形成の架け橋になることを期待したい。

障害者スポーツの認知・普及の向上には社会改善、環境改善などといった数々のメリットがあると筆者は感じている。障害者スポーツの認知・普及が今後いっそう進むことを願っている。